



# 教室の窓辺

## 体育で大切なことは

岡崎市立竜美丘小学校 教諭

加藤 雅也



学んだことをツイートする子ども

昨年度は、2年生の担任をしました。1年間の体育指導の中で、私は「運動の世界に浸りきる」「学びのメタ認知」の2つを大切にしてきました。そんなキーワードを大切に、2学期に「表現リズム遊び」の実践を行いました。そこで、まず子どもたちが「運動の世界に浸りきる」ことができるよう、題材のテーマを「どうぶつランド」「にんじやのさと」「ゆうえんち」の3つに設定しました。子どもたちは、興味をもって取り組み、心を解放させるとともに題材から得たイメージを体全体で表現することができました。「ウサギはかわいらしい」というイメージを大切に飛べない跳ね方を工夫する子、「にんじやはすばしっこい」というイメージを大切に、体勢や走り方を工夫する子など、動きに多様性が見られました。また、「学びのメタ認知」も意識しました。メタ認知には①自己意識、②他者意識の2つが大きく関わってきます。まず、①自己意識を大切に

ため、前時までの学びを視覚的に捉えることができる「学びの足跡カード」や、ビデオカメラに向かって授業の感想を気軽に伝えることができる「4組ツイート」を実施しました。この手だてによって、初めのうちは「楽しかった」「またやりたい」とだけ述べていた子どもたちが、徐々に自身の学びを認知し始め、「体を上下に動かしたから上手くりズムに乗れた」「次はこんなイメージをもって踊ってみたい」など、自身の学びを具体的に捉えることができるようになりました。次に、②他者意識を大切にするため、「友達と協力すること」「第三者から評価を受けること」を授業の中で取り入れました。「ゆうえんち」を題材にした授業では、「どうしたら、見に来た先生が遊園地らしいと思ってもらえるかな」という学習課題を立てました。前時までに一人で遊園地のアトラクションを表現していた子どもたちは、友達と協力して表現する必要性に気付き、複数人でアトラクションを表現していました。また、アトラクションに対するイメージをみんなで共有し合い、動きを工夫する姿も見られ、「友達と協力して運動することのよさ」を実感しているようでした。また、授業の終末で校長先生に「みんなの踊りから遊園地らしさが伝わって、とてもよかったです」と褒めてもらった子どもたちは、「4組ツイート」で、「校長先生にぼくたちの動きを褒めてもらえて自信になりました」と喜びを爆発させていました。

今後、体育の研究実践を継続し、重要なキーワードを模索していくとともに、これから関わる子どもたちが「体育って楽しい」と思えるよう、邁進していきたいです。



仲間と協力して「観覧車」を表現する子どもたち

コロナ禍で、当たり前が当たり前でなくなってきました。私たち教師は、前例のない中で、いかに子どもたちがより良い学校生活を送ることができるかを模索し、導いていかなければなりません。一方、子どもたちには、自分で判断し、行動していく力をつけていくことが、益々必要となってきました。その中で、加藤先生は、アイデア豊富に、前向きに取り組んでいます。昨年度の学級では、係活動とは別に、級友や学級のためにやることを自ら考え、実行する「カンパニー活動」というものを行い、子どもたちの自主性を伸ばしました。また、授業では、「スポンジフェンシング」を教材とし、オリンピック・パラリンピック教育に取り組みました。常に子どもたちの興味・関心を大切にして学習意欲を引き出しています。そのため、学級には温かな雰囲気があり、笑顔があふれています。

(校長 吉田 章二)



「こころ」は

自信と安心の貯金箱

岡崎市民病院長

岡崎市こども発達センター長

早川 文雄



Profile はやかわ ふみお

岡崎市出身

- S44 岡崎市立六名小学校卒業
- S47 岡崎市立竜海中学校卒業
- S50 愛知県立岡崎高校卒業
- S56 岐阜大学医学部卒業
- H 8 第二青い鳥学園 副園長
- H10 岡崎市民病院 小児科部長
- H25 岡崎市民病院 副院長
- H29 岡崎市こども発達センター長
- H30 岡崎市民病院 院長

「発達障害の子どもが増え続けており、教育や子育てがたいへん難しくなっている」よく耳にする問題提起ですが、どうしたらよいのでしょうか？

発達障害とは特性の集合体

発達障害とは嗜好や行動の特徴がきわだった「特性」を持ち合わせた状態を示す用語であり、「特性」が「個性」を形成するとされています。つまり、発達障害といっても一般的な「障害」の範疇には入っていないのですが、「障害」という単語を使用していることで多くの誤解が生じており、対応に多くの混乱がみられています。「特性」を豊かに持ち合わせる人格は個性的であり、良くも悪くもユニークな人生を歩まれることが少なくないですが、奇人・変人と称されるばかりでなく、達人・天才と評される人も多くが発達障害であり、「特性」豊かゆえ、個性的な人柄であることが多いのは、周知の事実です。

特性は脳の働き方の特徴であり、「モノが好き・ヒトは苦手」「こだわりが強い」といった特性を自閉症スペクトラムと呼び、「注意散漫」

「衝動性（ガマンが苦手）」を注意欠陥多動症と呼んでおり、現時点でおよそ十人のうち一人がどれか該当するとされています。では、特性が少ない人はどうでしょうか。特性がなければ個性的ならず、没個性とか凡人と評されることが多いのですが、世の大半はこのタイプの人であるため、「平均的」「標準的」と形容され、受け入れやすい傾向にあります。養育者も教師も、平均的で無難を良しとすることが多いため、「特性」ある子どもは周りの大人の「標準化願望」に苦しむことになります。

発達障害児の教育と子育て

医師の多くは「こだわり」と「衝動性（ガマンが苦手）」を強く持ち合わせ、「特性」をバネにしないと受験の難関を突破できない？と思わせるほどです。その一方で「関わりが苦手」「不注意」といった特性により患者さんとトラブルになる医師が後を絶ちません。医学部受験に限らず、どんな領域においても他人より秀でるには「特性」が不可欠と言えますが、周りの標準化圧力が強いと

「特性」をバネに飛躍する以前に、自尊心や安心感が打ち砕かれてしまい、学童期の不安障害である「登校しぶり」、うつ状態である「引きこもり」に陥ってしまいます。欧米で優勢な個性尊重に対し、本邦における標準化圧力の強さが「特性」への寛容を欠き、特性児の二次障害を助長すると指摘されており、不登校・引きこもり対策としても学校・家庭で標準化願望の放棄が有効です。発達障害児は長所と短所を著しく併せ持つことが特徴であり、長所を見つけ注目して育み、短所はできる限り無視する接し方、つまり標準化願望を捨て、褒めながら育て、心理的・経済的に自立できる成人への成長を目標にするべきです。

「こころ」は自信と安心の貯金箱です。ストレスという出費は誰でもいつでも不可避ですが、貯金が多ければ平気なストレスであっても、貯金が少ないとヒヤヒヤですよ。この違い、すなわち子どものうちに貯まる自信と安心が、将来の「こころ」の安定をもたらすのです。そのために、彼らにはイソップ寓話で云う「北風」ではなく、「太陽」のように接してあげてほしいものです。